



50 号を迎えた「お茶の水地理」

鈴木 純子

「お茶の水地理」が 50 号に到達した。年 1 回の刊行なので、50 年という年月が経過したことになる。その息の長さ、維持のために払われてきた数々の尽力に、まず敬意と感謝を捧げたい。

お茶の水地理学会は一昨年、2007 年に設立 25 周年を迎えた。したがって「お茶の水地理」はお茶の水地理学会より 25 歳も年長ということになる。創刊号は 1959 年、地理学研究室が教室の機関誌として刊行している。編集委員は 4 年、3 年の学生各 3 名である。創刊号の編集後記にかかげられた「将来は、本当の意味の‘研究室雑誌’として大きくのびて行き、‘お茶の水地理’の名に恥じないような研究レポートの載ることを目指している」という目標は 50 号を迎えてしっかりと達成されていることが実感できる。

ところで、3 年生の委員は飯田・岡本・日月（それぞれ現在は西岡・伊瀬・徳山）の諸氏、私の同級生であり、4 年生の岡・村山・森田（竹田・清水・松浦、松浦氏は故人）さんも懐かしい顔ぶれである。発案者でもあった渡辺光先生が発刊の辞として「国立女子大学とその中に於ける地理科のあり方」を熱く論じておられるほか、諸先生の随筆、7 回卒業生の卒論要旨、巡検記録など、現在の礎石はすでに整っている。

さて雑誌そのものの手ざわりは、われわれの年代にとっては、まさに「3 丁目の夕日」の風情である。会員の過半数の方にはもはやイメージすらしづらいと思うが、用紙はザラ紙、印刷は孔版、いわゆる謄写版ないしガリ版印刷である。余計なことだが、若い方々のために一応説明をしておこう。パラフィンなどの被膜を塗布した薄い和紙（原紙）を使い、板状の鉄ヤスリの上で鉄筆を使って文字や図を書く（「原紙を切る」という）。筆記部分は紙の塗料が削られて細かい孔がたくさん開

き、「透かし」状態となる。木枠に原紙を張りわたし、印刷用紙を枠の下にセットして、クリーム状のインクを均一につけたローラーを原紙上に走らせると透かし部分だけがインクを通して、印刷されるというしくみである。枠とローラーで 1 枚ずつ刷る手作業が原型（エジソンの発明）だが、さすがにこの時代には内側からインクの供給されるローラーを用いた機械で自動的に印刷できたはずである。学校のテスト問題などもこの方法で印刷したので、教職につけば原紙切り（ガリ切り、ヤスリと鉄筆の作るカリカリという音が語源）は必須のスキル、字の巧拙のみならず、均一、適切な筆圧が問われる作業ではあった。「お茶の水地理」の印刷はプロの仕事である。

学会と会誌の年齢差に戻る。お茶の水地理学会の設立総会は 1982 年 5 月である。1973 年から約 10 年にわたり、当時の主任、式先生を中心に OG も参加した「お茶の水地理談話会」の蓄積があり、その発展としての地理学会ということになる。「お茶の水地理」の発行者は、地理学教室から地理学会に移る。しかし、私自身は薄皮まんじゅうの皮のようで、創刊時に学生、今はなぜか学会長というご縁はあるが、談話会や学会創設の頃は、土曜日午後も勤務に追われ、久しく圏外状態だった。その間大学の組織、学会や機関誌をめぐる環境にも大きな変化があった。大学の DB「Teapot」により、全文がネットで読めるようになった本誌を感慨深くブラウズしながら、変革の波を乗り越えてその意義を全うして行けるよう願っている。

すずき・じゅんこ

第 9 回生

現お茶の水地理学会会長